授業方法について独自に工夫していること　【人文社会科学系】
できるだけ学生が興味を持てそうな教材を選ぶよう努力している。また，教科書を始めから順番に読み進めるのではなく、面白そうなユニットだけを選んで授業を行っている。
できるだけ学生が興味を持てそうな教材を選ぶよう努力している。また、授業が単調にならないように、視聴覚教材を使うなどして授業にメリハリをつけている。
授業の資料については、「学びネット」を利用して、事前に配信をしている。 ほとんどの授業において、パワーポイントを使っている。時々インターネットを利用した動画、テレビで放送された環境問題関係の映像をDVD化して流したりしている。
自作の動画講義を活用している
この授業の形式は、具体的な事例をVTRで示しながら講義を進めるというものである。毎回、授業の始めに、その回の内容やVTRの見所など、授業の目標を明確に提示する。また、授業の受け方、ノートの取り方、授業と試験の関係など、第1回目の授業をオリエンテーションとして丁寧に説明する。ただVTRを見せるのではなく、いかにノートに内容を定着化させるか、そして、いかに内容を具体的に理解させるかというところにもっとも力点を置いている
書作品の制作を通して、感性を高め、創造力を広げていくために、最初に、自らの漢字・ひらがな・カタカナ・アルファベットや縦書き・横書きへの意識と、他者が持つ意識の差異や相関性を探り、文字文化への理解を深めることからはじめた。また、中国や日本の書の古典にみる表現の多様性について、一回ごとにテーマを決めて、いろいろな用筆と表現性の関係についても実技を含めて学習できるようにした。
学生が主体的に参加できるように工夫している。その為には、学生の意思、希望、決定等ができる限り反映できるような活動を授業目標の範囲内で設定している。授業には、海外からのゲストを迎え講演会、談話会なども実施し、学生の興味・関心を高められるようにしている。学生間のピア・フィードバックを取り入れ、教師だけでなく、学生間でも学べるようにしている。多文化リテラシーのプレゼンテーション等では学生自身に評価視点を作らせ、どのようなプレゼンテーションや発表の仕方がよいかを考えさせた。英語コミュニケーションでは、英語を運用することに焦点を当て、教科書を見ているのではなく、電子黒板を利用したヘッドアップラーニングによる口頭コミュニケーション練習に重きを置いた。
指定文献の内容を授業プリントに空所補充の形式で記入させることにより、文献を確実に読むよう促した。
多くの学生は、本講義で取り上げた作品について、これまで親しんできた経験がない。そこで、様々なかたち興味を引けるように工夫した。もともと魅力ある実作品を選ぶのはもちろんであるが、日本語訳の他、ルビを振った訓読や、時にはカタカナでの擬似的な中国語発音を示すことで、内容理解だけではなく、朗読もできる（時には授業中に朗読する）ようにした。また授業で興味を持った場合、今後更に深められるように、図書館所蔵の図書をはじめとして、次に進むための資料を必ず提示するようにした。また、三度のグループワークを通して、中国古典詩文の様々な特徴をとりあげて議論することで、有意義な読解に必要な技術の一端を具体的に身につけられるようにした。
1．英語によるコミュニケーション能力を高めるために、毎週異なる相手と組んで英語を使うアクティブラーニングの活動を重視した。 2．課題に真面目に取り組めるように、毎週課題ノートにシールを貼り、そのシール数を評価に反映した。 3．クラス全体での発表会の日には、一人一人が発表するだけでなく、相互評価させた。
学生が海外の事情を自分の事としてとらえられるような、興味を喚起するような授業を心掛けた。 今後も学生が意欲的に取り組める環境を提供することで、外国語の学習は単なる知識だけでなく、興味の対象が広がり、言語を理解できるようになることで、他者とのコミュニケーション能力も上がることを今後も授業の中で生徒たちに伝えていきたいと思っている。

DVD教材を使用しました。学生の教科書にはスクリプトが載っていませんので、その理解を助けるため補助プリントを作成し、教科書の演習問題と関連させ書き込めるようにしました。構成や順序等見易い、分かり易いように工夫したつもりですが、学生にとって有益だったどうかは分かりません。
40名を超える大人数のクラスで、しかも、学生間の英語力に違いがあるクラスであっても、ほとんどの学生が満足できるような指導をするように心がけている。ペアワークやグループワーク、グループプレゼンテーションなどを多く取り入れ、授業が単調にならないようにし、皆が英語学習を楽しめるような雰囲気作りをするようにしている。
アクティブ・ラーニングの能動的授業として、グループ発表形式である。能動的および自主性を重視し、初回の授業で自分たちでグループを作り発表日程を決め発表チャプターを選定する。発表形式および発表時間は初回の授業で説明する。基本的にテキストの問題の解答および解説をする。但し、各グループの工夫によりバリエーションは可能である。大学1年で修得した英語力の応用・発展の位置づけとして、英語文章の主題、問題点、論法の分析等を重視した読解法である。 発表担当グループに自信を持って発表してもらうべく、発表前に次の手順を踏む：教授者は解答を渡し解答を確認してもらう。疑問点を教授者に質問し、英語文章の内容を正確に理解する。基本的に教授者は発表を中断させないように配慮するが、必要に応じて適宜補足説明を加える。通常発表後に補足説明およびコメントをする。教授者は、発表の内容（英語文章を正確に理解しているか、説明は適切で分かり易いか等）を評価する。この授業の目標は次の二点である。①自分が理解することと、他の人に理解させることは異なること：人に理解させるにはまず自分が英語文章の内容を十分理解する必要がある、説明の言葉や構成を工夫する必要があることを認識する。②他のグループの発表を聞くことによって、客観的に発表の意義を認識する。
独自に工夫していることは特になし。むしろ、可能な限りオーソドックスな憲法の講義内容を意識し、これに、教員志望の学生が受講していることをごく若干加味するとともに、日本国憲法に限らず基本的な法制度に関する情報提供を行う事を意識した。
資料を多く使用し、かつスライドなど映像資料を多用して資料内容を目で見て確認できるように心がけた。毎回、質問や意見はコメント紙で受け付けた。そして、次の授業で回答した。
異文化についての理解を深めることを目的とするため，ロシア人の国民性など比較的アプローチしやすいテーマから始め，次第に宗教や社会のありようなど「濃い」テーマへと展開していった。授業にあたってはレジュメや映像資料，カタログ資料や音楽など，多角的な観点から理解を深めてもらえるよう，様々なアプローチを試みた。
机間授業を通じて学生との意思疎通を図りながら、個々の質問に丁寧に答えることによって、学生の理解を深めるようきめ細かな授業を行うよう努めている。具体的には、例えば、各自テキストの問題を解いている間、教室を廻りながら、彼らの回答の様子を観察しながら、適宜個別指導をしたり、質問を受けたりすること（机間授業）を常に念頭に置いている。これは学生とのコミュニケーションをとるのに良い方法であり、また個別的にしか質問できない学生もいるからである。また、学生の顔と名前を覚えることも、基本的なことであるが、少人数の語学授業では必須のことである。学生によっては、姓ではなく、名前で呼んだ方が効果的な場合もある。
内容だけではなく関連した事項も解説し学生の興味関心を引き出す工夫を行った。
ともすれば難解な印象を持たれがちな内容を取り上げる方針であったので、講義中心になることを避け、受講者に課題を投げかけては検討させ、それを授業者が解説するという方法を徹底して繰り返した。その際、単独で考えるだけではなく、グループで検討し合うことを取り入れることによって、自身の考え方や発想の仕方を相対化する機会をなるべく多く持たせるようにした。検討結果も、挙手による口頭での説明、ペーパーへの書き込み、グループ単位でまとめ+提出（翌週、評価）など様々なパターンで回答させ、またグループのメンバーを期間内で入れ替える等、授業が平板化してしまわないよう心掛けた。

（1）英語テキストの読解だけでは受講生も退屈するので、映画の脚本をテキストとし、その週読んだ分、実際の映画を観るようにするなどして、多角的な授業を心掛けている。また「裏ワザ流英語」という独自の指導法に基づいた英語発話の指導も行うなど、総合的な英語学習ができるよう工夫している。（2）独自のテキスト『英語の裏ワザ』を用い、ベーシック・イングリッシュの考え方をさらに日本人学習者向けに発展させた指導法を行なっている。（3）3人の講師によるオムニバス授業により、幅広いトピックを元に、アカデミックな考え方、ものの見方を提示し、大学での勉学の導入になるよう、心がけた。
スモールステップで着実に知識が定着するように、復習に力点をおき、毎回前回の授業内容に関する小テストを行っている。また、できるだけオーラル・コミュニケーション能力を高めるため、ペア・ワークを実施した。
経済を扱うので、実感を持ってもらえるように外部講師を招いたり、施設見学に行ったりしている。
メディア制作に関わって、いくつかの情報機器の利用を促した。
学生が意識していない先入観や偏見に気づかせつつ、教員の指導、誘導で学習者の知識もまた大きく影響を受けるということを、実例を見せつつ、体験的に学ばせること
アクティブラーニングを取り入れるために、ペア学習をする時間を多めにとった。その際、できるだけ多く机間巡視を行い、英語でのコミュニケーションを取りやすいように助言を行った。
英文を逐一訳して読むのではなく、限られた情報の中で全体的な内容を予測するようリードすること。
授業内容をより明確化し、履修者が取り組みやすくしていく点に配慮している。
【F英語コミュニケーションI】授業初回に、記述式のアンケートと英作文のミニテスト（成績評価には含めない）を行い、各学生の英語学習の背景や英語学習に対する意識、現時点での英語力などをおおまかに把握して、次回以降の指導の微調整に役立てている。また、毎回の予習を成績評価に含めて、学生の自宅学習を促しつつ、繰り返し効果による授業内容の理解と定着を図っている。さらに、授業内におけるリスニングとスピーキングのアクティビティの割合を半々とし、コミュニケーション能力の育成に必要なインプットとアウトプットの量的・質的なバランスが取れるよう心がけている。 【F英語II】授業初回に、記述式のアンケートと英作文のミニテスト（成績評価には含めない）を行い、各学生の英語学習の背景や英語学習に対する意識、現時点での英語力などをおおまかに把握して、次回以降の指導の微調整に役立てている。また、毎回の予習を成績評価に含めて、学生の自宅学習を促しつつ、繰り返し効果による授業内容の理解と定着を図っている。
学生に考える機会をできるだけ多く持ってもらうことを中心においているため、講義形式の部分も常に問いかけ（例えば、クイズ形式）→話し合い→発表の形式を取っている。
授業では会話練習を中心とし、文法項目の解説については最低限にとどめた。文法や基本表現を用いた作文練習については毎週1週間で十分にこなせる課題を出し、テキストや教科書を参照しながらその課題をこなしてもらうことで文法や基本表現の習得ができるようにした。
学生参加型にするため、ペアワーク、グループワークなどを推奨し、グループでのプレゼンテーションも実施した。（英コミⅠ） リーディング主体の授業であるが、学生参加型にするため、ペアワークやグループワークなどを取り入れた。（英語Ⅱ）

英語コミュニケーションⅠの方は、教材自体は難しくないのですが、新たな語彙やネイティブの使用する表現がたくさん学べるものになっていました。授業の中では、聞く・話す能力の向上に焦点をあて、学生同士が学習した表現を使って行うコミュニケーション活動を毎回入れました。 英語Ⅱの方は、TOEICのスコア向上を目指して、きめ細かい指導に心がけました。どんどん教材を進めるというよりは、少しゆっくりではありましたが、学生の質問に答えながら、文法はもちろん、語彙や表現を例文を挙げてたくさん説明しました。 両方のクラスで、コメントシートを活用しました。今日の授業で学んだこと、質問があれば書いてもらい、翌週の授業でその質問に復習もかねて答えるということをしました。全員の前で手を挙げて質問する学生はなかなかいないのですが、コメントシートにはびっしり学生が毎回、質問を書いてくれました。こちらがきちんとフィードバックしてあげることで、学生の学習に対する意識も向上したように感じました。
メインテキストである映像教材を使用しながら、英語を視聴覚の両面から無理なく習得させるよう努めている。また、学生の学習意欲を高めるために様々な補助教材を取り入れつつ、英語をより身近な存在に感じてもらうよう常に工夫している。
一方的な授業にならないよう、毎回5、6人の生徒に問題提起してもらい、そこから憲法の議論につなげていく工夫をした。
【L多文化リテラシー】学生の興味のある分野に配慮して授業を進めた。 【L市民リテラシー】コメントシートを配布して、授業内でそれに答えた。
主に理系（数学、理科、養護）および体育の学生から成っていたため、政治や社会の複雑な案件や深い知識を扱うよりは、より広く、かつ一般教養の知識として記憶に残るような授業の進め方を心がけた。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。　【人文社会科学系】
2回の筆記試験とTOEICの成績
授業後に毎回行う小テスト
最終の期末試験成績を元に成績を評価したが、毎回出席をとっていたので、欠席者に対しては、回数によって一定の減点を行った。
レポートのできに出欠状況を加味
授業期間中に授業の内容を問う中間筆記試験をおこない、学期末に授業の内容を問う期末筆記試験をおこなう。中間試験の結果40%、期末試験の結果60%の合計で成績を出している。
毎回授業による学習活動に対する平常点（40%）、授業での学習を活かして制作した作品表現（30%）、授業での学習を通して広げられた表現への考えについてのレポート（30%）の合計点をもとに評価した。
学生の授業への参加態度(グループ活動、個人活動、授業中のディスカッション等での発言、課題発表等)、及び、作品(課題)、個人レポート、グループレポート等、すべての課題の出来具合。レポートは、内容、構成、理解度、広さ、深さ、独創性、文章などの観点から評価。授業、活動でのリーダーシップ、問題解決等、特記事項があればそれも加味して評価。 学生の自己評価も実施し、その自己評価から学生の授業の理解度等を知る手がかりとしている。
レポート2回分で70%、授業内レポート20%、出欠10%の配点で評価した。レポートの採点基準としては、調べたことをわかりやすい形で説明しているか（1回目）、指定された文献の内容を踏まえたうえで自分の見解を述べているか（2回目）、誤字脱字や文構造の乱れがないかどうか（両方）、という点を重視した。手書きで提出させたため、その手間を評価する気持ちから少し甘く評価しすぎた面があると反省している。
50%は授業参加の状況に対する評価である。これは三度のグループワークでの積極性の他、原則として毎回授業の最後に課題を出し、当日の内容を踏まえて各自が回答を提出させたものを評価した。残りの50%は期末レポートに対する評価である。レポートは、①全授業を8のトピックに分け、各自が一つを選択してその内容の要約をする。②授業で扱ったものに関連する作品（複数の例を教員がpdfで用意したが、学生自身が独自に探したものでも可とした）について評価・分析する、という二つのパートから成り、①については正しくまたわかりやすく要点を整理しているか、②については独自的な分析ができているかを中心に評価した。
シラバスで学生に周知した成績比率で評価した。 1．平常点10%:　講義に出席し、積極的に学んでいたかどうか。（欠席、居眠りは減点） 2．提出課題　20%:　10回分の課題が毎回2ページずつできているか、期限を守って課題をやりシールをもらったかどうか、を基準に、A+, A, A−, B, Cの評価をつけ、点数化する。 3．試験　70%:　スピーチ1回目が10%、スピーチ2回目が10%、筆記試験が50%という比率である。スピーチは5つの項目で評価し、筆記試験は教科書で学習したページをもとにリスニング問題を含む100点満点のテストを換算する。
授業への出席率、授業中の態度、課題への取り組み、及び期末テストの結果
各章ごとに配布している上述の補助プリントを見れば、学生達の普段の理解度・授業態度が分かりますので、それらを平常点として評価しました。加えて学期末のペーパー試験で評価しました。

英語が得意、不得意に関係なく、どれだけ意欲的に授業に参加し、授業外学習にも取り組み、学期末までにどれだけ定着したかを見ながら評価をした。 従って、評価の内訳は定期試験（リスニングを含む）、復習テスト2回分、プレゼンテーション、課題提出、そして授業への取り組みなど総合的に見ながら、成績を出した。
シラバスに明記した通りに評価しました。 定期試験３０％、出欠席および授業参加度２５％、発表３０％、提出物１５％
通常の法律学における答案評価の基準に原則的には準拠して成績結果を導出した。特に評価において重視をした点は、講義時において強調した点でもある、《一般にメディア等が憲法をめぐって議論している言説だけではなく、憲法条項の文言・構造を踏まえた検討を行っているかどうか》、という点と、現実の身近な事象を憲法上の論点として把握しようとしているか、という点であった。
ペーパーテストが中心です。授業にきちんと出ていれば解答可能な内容のテストです。
平常点３０パーセント，授業後のコメントペーパー４０パーセント，期末レポート30パーセントという形で計算し，成績を出した。コメントペーパーもレポートもしっかり客観的な見地から考えられているか，独自の視点がみられるか，論理的に筋の通った形で書かれているか，といったことを評価のポイントとした。
定期試験の評点による。初級語学の試験では主観的判断の入る余地はないので、点数は明快である。
講義の内容ができているか否かと独自の見解が示されているか否か。
授業内容全体を振り返ることができる問題を学期末の試験で課すことによって、授業目標に対してどの程度達成できたかを確認した。授業期間を通じて身についたはずの方法論を用いた分析ができているか、他者を説得できる説明が自分なりの工夫とともにできているかを基準としている。通常の授業における課題への取り組み姿勢も評価には加味した。
（１）基本的には期末試験の点数によるが、普段の授業中の受け答えなどに基づく平常点を１０％考慮している。（２）中間試験と期末試験の結果を元に成績を出した。（３）３人の講師それぞれが担当授業分の最終日に試験を行い、その結果を総合した。
小テスト3割、口頭テスト2割、期末テスト5割を基本に、全体の平均点を若干調整して総合的に評価した。
通常の授業への取り組み態度と最終レポートで評価しました。リテラシーを身につけることが目的ですので、日ごろの授業への参加、取り組み姿勢を重点的に評価しています。
授業内で制作した作品（写真、新聞、動画）と、その振り返りレポート、および出席と授業への取り組みによって評価した。振り返りにレポートに対して多くの評価点を与えている。
授業を大きく3つのセッションでくくり、そのセッションごとにレポートを提出させた。セッションごとに、何に留意するべきかを口頭で指示し、問題意識を明確にさせたので、その点が不明瞭な学生の評価は低くなっている。
授業で取り上げた内容に関するリスニング・リーディングについての定期試験70％ 授業参加度・ペア学習への取り組み30％
与えられた英語の文章をよく理解し、内容をまとめ、英語で正しく表現できているか確認するための総合試験を行った。それを規定以上クリアしたかを基準とし、成績とした。
平常点（出席、授業に取り組む態度，姿勢、小テスト等）と学期末試験を総合的に勘案して評価を出している。

【F英語コミュニケーションI】平常点２５％、予習点２５％、期末試験５０％の割合で、３つの観点から総合的に評価した。このうち予習点とは、毎回予習をすることによって学生が得られる点数で、その有無については、授業開始時の各学生のテキストやノートのチェック、及び授業時間中の応答の仕方によって確認した。提出した成績評価は、上記の基準を満たす学生が大半であったため、Ｓ・Ａ・Ｂが多く、Ｃが若干名であった 【F英語II】平常点２５％、予習点２５％、期末試験５０％の割合で、３つの観点から総合的に評価した。このうち予習点とは、毎回予習をすることによって学生が得られる点数で、その有無については、授業開始時の各学生のテキストやノートのチェック、及び授業時間中の応答の仕方によって確認した。提出した成績評価は、上記の基準を満たす学生が大半であったため、Ｓ・Ａ・Ｂが多く、Ｃが若干名であった。（なお、本授業の成績評価にはTOEICスコアも含まれるため、スコアの要件を満たさなかった者については、外国語教育講座の規定にしたがって成績を提出した。）
1クラス50名を超える外国語のクラスということで、現実的に、個々の学生を覚え、平常の活動を評価することは難しいと思われますので、基本的には、定期試験で評価し、授業中の発表などがある場合は、記録に基づき定期試験による評価が境界線の場合に考慮しました。
定期試験の得点で成績結果を出した。
期末試験結果およびプレゼンテーション点に平常点を加味し、総合的に判断した。（英コミ１） 期末試験結果および平常点で総合的に判断した。（英語２）
英語コミュニケーション Ⅰ では、出席・授業態度（20％）、筆記小テスト2回（40％）、期末口述テスト（40％）で出しました。出席・授業態度には、毎回提出したコメントシートの内容も加味しました。 英語 Ⅱ では、出席・授業態度(20％)、e-learning(20％)、期末試験（60％）で出しました。 今回、初めて英語サポートセンターの方にご協力を頂いて、e-learningを取り入れましたが、ほとんどの学生が自分なりに弱点を克服しようと頑張って取り組むことができました。
授業内で実施したリスニング小テストの結果、英語の発音、イントネーション、ジェスチャーも重視したグループ・パフォーマンスの中での各受講生の評価、学年末試験のスコアーを考慮しつつ総合的に判断した。
出席、授業態度はもちろん、期末レポートにおいては自分で選択した課題に対して授業あるいは教科書で学んだ思考方法や知識を踏まえて、その課題に対して自己の主張を説得的に説明できているかを重視した。
【L多文化リテラシー】レポート70％、出席・コメントシート30％で評価した。 【L市民リテラシー】テスト70％、出席・コメントシート30％で評価した。
出席および最終レポートでの着眼点に注目した。特にレポートの着眼点については、ユニークさに加え、なぜその点に着目したのか理由を明確にしているものを重視した。

アンケート結果を受けて改善したいところ　【人文社会科学系】
授業の難易度と一回当たりで扱われる授業内容の量は問題がなかったようである。ただ、丁寧に説明しているつもりであったが、それでも学生に対する配慮が十分でなかったかもしれない。さらに気を配る努力をしたい。
授業の難易度と一回当たりに扱われる授業内容の量は問題なかったようである。ただ、初めて使用したテキストであったため、こちらにも余裕がなく、学生に対する配慮が十分でなかったかもしれない。今後は、学生が理解できたかどうかをしっかり確認しながら授業を進める努力をしたい。
週あたりの学習時間(課題・レポーに費やす時間も含む)については、「なし」の回答割合が56%もあった。課題やレポートは数回課したので、「なし」がこれほど多いというのは納得できない数字である。ただ、全般的に自学自習の習慣がないのも実態であろう。
遅刻には気をつけねばと思う
問1・問12の回答において、①～②のプラス回答が、問1では全体の96.3%、問12では全体の84.8%を占めたことから、教養科目の多文化理解という所期の目標はほぼ達せられたととらえている。しかし、問2・問3・問11において、③～⑤のマイナス回答が、問2では57.6%、問3では60.5%、問11では60.6%を占めたことに改善点があると受け止めた。授業の双方向性を強化して、課題に対して自らが問題点を見出し、アプローチし、発言する・行動するということが達成できるように、今後、さらに留意して授業を構築したい。
受講者数が多いため、個々の学生への細かな指導や助言が行き渡らないところもあったため、学生とのコミュニケーションをとるための方策について、今後検討していきたい。
今年度初めて担当した科目であったので、当初作成したシラバス(2月時点)とは少し変更して、授業を行った点である。どのような学生が割り振られるか、また、英語力がどのくらいか、学生の興味関心はどのような点か等が把握できない時点でシラバスを作成したのが原因である。授業の2回目までに学生アンケートを実施し、興味関心、学習経験等の調査を行い、シラバスを改訂したが、古いシラバスを見て受講した学生の期待に添えない部分もあったかもしれない。今後は、さらにきめ細かく調査を進めてから、授業を設計したい。初めて教養や英語の授業を担当し、不備な点が多いと反省していたが、「授業がおもしろい」などの感想をもらって、うれしかったので、今後、改善に努めたい。
採点のための時間が取れる見込みがなく、レポートを3回課す予定だったのが、2回になってしまった。同様の理由で、授業内レポートの回数も予定より少なかった。これらの点を改善したいと思う。
授業の難易度について「難しい」が45.9%、「難しすぎる」が10.8%あり、また一回で扱われる授業内容の量について、「多い」が32.4%、「多すぎる」が5.4%あった。一方で、この授業のための週あたりの学習時間は「1～2時間」以下が94.6%を占めた。 ここから、授業内容に対する予習や復習を学生に求め、それを前提とすることで授業時間内での内容を絞り込むことによって、適正化することを目指すべきであると考えている。具体的には、単位に見合った量の授業外学習を強く求めるとともに、自然と十分な準備ができるように課題の出し方を工夫し、授業内容のスリム化のみならず、準備によって強い達成感が得られるような内容としたい。
全体的には、問1に対して大半の学生が肯定的な捉え方をしているが、問7の学習目標の達成についてはクラスのほぼ40%前後の学生が肯定的に受け止めているにとどまっている。授業に真面目に取り組んで英語を使ってみても、「英語が使えるようになる」という目標に対して、半期の講義で自信を持たせるのは難しい。講義中に、学生が英語を使う場面をもっと増やす必要があると考える。

「この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた」とする生徒が80%近くにのぼったことは、生徒の興味を喚起し、親しみやすい語学の授業を心がけてきた結果と受け止めている。「授業の難易度」が、「難しい」と答えた生徒が40%を超えたことは真摯に受け止めもう少し生徒にわかりやすい授業を再考してみようと思う。「この授業の内容をさらに学びたい」と回答した生徒が50%ほどいたが、今後はさらに、学生が興味や関心を持ち、面白いと思えるような授業を執り行い、魅力的な授業ができるよう心掛けたい。

「この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた」とする生徒が90%近くにのぼったことは、生徒の興味を喚起し、親しみやすい語学の授業を心がけてきた結果と受け止めている。「授業の難易度」が、ちょうどいいと答えた生徒が60%ほどだったことや、「この授業の内容をさらに学びたい」と回答した生徒が70%ほどいたことも、物語っている。今後も、学生が興味や関心を持ち、面白いと思えるような授業を執り行い、魅力的な授業ができるよう心掛けたい。

授業外学習の時間に関して、7割の学生が1時間未満しか費やしていないので、授業外学習の時間数がもっと増えるように工夫したい。

発表形式授業においては発表担当グループは責任を持って準備しますが、他方予習をしないで授業に臨む学生が多いという難点があります。初回の授業で予習は必須であることを伝えましたが、発表後の質疑応答時間には質問は出ずディスカッションに発展しませんでした。予習をしていないので、疑問点が明確になっていない状態でした。只、授業後に個々に質問に来ましたので、疑問点を共有すべく授業中に疑問点を提示すべきと指導しました。これは改善点の一つです。授業中に疑問点を提示しやすいようなクラスの雰囲気を作るべく授業運営の改善を図りたいと考えます。もう一つの改善点は、全員参加型とすることです。そのためには、発表箇所を選定することによって発表時間を半減させ、後半の時間はテーマを設定し、グループあるいはクラスでディスカッションをすることによって全員が発言する時間を作りたいと考えます。それによって、英語文章の内容理解も深まり、発表グループ以外の学生も授業に参加したという意識が深まると考えます。

特に法律学を大学で学ぶ事を志しているわけではない学生が受講するということを過度に意識したために、学生によっては物足りなさを感じることになってしまったかもしれないことを反省点として考えている。学校教員の活動との関連性が高い事項・憲法条項から講義における解説と検討をスタートすることで、より先端的な憲法学・教育法学上の議論を扱う講義内容にする可能性を模索しようと考えている。

基本的に好意的な評価であったと思う。具体的には、問8の「教員の話し方は聞き取りやすい」が「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計が59.4%、問9の「教員の説明はわかりやすい」が同62.1%、問10の「教材・教具（板書、プロジェクター、配布資料等）はわかりやすい」が同65.6%、問13の「授業の難易度」が「ちょうどよい」が75.7%という数字に表れていると判断する。

学生たちの評価は比較的良かったように思う。特に授業の難易度や分かりやすさ，聞き取りやすさが高い評価だったので，率直に言って嬉しい。今後も学生たちの異文化に対する視野を広げていけるような授業を心がけていきたい。

題目が抽象的でわかりにくいとの指摘があった。「言語の収奪」ではなく「言語の諸相」とすべきであった。

授業時に提示する課題の設定に際しては、一定の努力・工夫を経て初めて自分なりの理解に到達できるレベルのものを用意したつもりであったが、アンケートの記載による限り、これが難解過ぎたようである。この点については、もう少し、わかりやすい課題設定にする等の工夫をしなければならないと考えている。

（1）「久しぶりに英語の授業が面白いと思えた」といったアンケート結果が多く、受講生には概ね好評であったと思う。特に、「裏ワザ流英語」の指導が好評だったので、次からはこの指導の時間を多目に取るようなことも考えてみたい。（2）「学生どうしで授業内容を深めあった」という項目が「どちらともいえない」の回答が多かったが、今後、学生どうしで英会話の練習をするようなプラクティスの導入も検討してみたい。（3）「この授業のための週当たりの学習時間」の回答が、かなり低かったので、今後は講師それぞれがある程度負荷のかかる宿題を課すなどして、授業外の学習時間を増やすようにしたい。

授業時間を延長してしまうことについて、意見が出ていた。外部講師は時間ぎりぎりまで話をしたいという熱意を持っている方が多く、結果的にそのようになってしまうことがあったと思う。改善はすぐには難しいが、外部の方との事前打ち合わせにより労力を割くことで対応を考えていきたい。
メディア制作を中心として、理論と実践を往還するかたちの授業であったことが、レポートにおける記述の内容をそれなりに豊かにしてくれた。アンケートでは問3や問12において③が、また問15において④が少なからずみられることから、さらに自主的な学びにつなげていけるようにする必要があると考える。
学生と教員の間のコミュニケーションは取りにくい印象があったが、アンケート結果でもそれが如実に出ていた。レポートに対する回答は実際問題として数が多く、対応しきれない。
授業の難易度、1回あたりで扱われる授業内容の量ともに「ちょうどよい」と答えた学生が8割を超えていた。この授業のための週当たりの学習時間が1時間未満が7割、別のクラスでは1～2時間が4割で、もう少し多くの課題を与えて、個人での事前・事後学習にも取り組んでもらえばよかったと思う。
学生が自ら考え答えを導き出し、それを表現するという目標に向かっての示唆が、多少弱かったかもしれない。よって今後は、小テイスト形式で提出してもらう中で、その点を克服したい。
受講生が少なく、担当教員として指導しやすかったこともあり、個々の設問に対してまとまりのある回答を得られたように思われる。ただ板書事項を丁寧にわかりやすくするという点、全ての履修者が|より積極的、意欲的に授業に参加できるように取り組んでいきたい。
【F英語コミュニケーションI】授業の難易度については、「ちょうどいい」と答えた学生が7割弱、「難しい」と答えた学生が2割強を占めていたため、今のレベルを基本的には維持しつつ、必要に応じてヒントを多めに与えたり解説を詳しくしたりするなど、理解を促す工夫をしていきたい。また、「授業内容の量」は、5割弱の学生が「ちょうどいい」、4割の学生が「多い」と回答しているため、やや量を減らす方向で検討したい。さらに、スピーキングの時間を制限せず、もっと増やしてほしいとの要望があったため、時間的及び人数的な条件が許す範囲で、出来る限り善処したい。 【F 英語II】授業の難易度については、「ちょうどいい」と答えた学生が7割で、残りの学生が約半数ずつ「易しい」「難しい」と回答していた。そのため、基本的には今のレベルを維持しつつ、必要に応じてヒントの量や解説の内容を調整するなど、個々の学生に合わせた対応を心がけたい。また、「授業内容の量」は、6割弱の学生が「ちょうどいい」、3割弱の学生が「多い」と回答しているため、量を僅かに減らす方向で検討していきたい。
同様の内容の授業を本学のより小人数の英語コミュニケーション科目や他大学の20名以下のクラスでも実施しましたが、やはり、コミュニケーションを主体とした授業形式であったため、少人数のクラスで効果的で授業評価も好評であったと思われます。英語Ⅱは今年度でなくなりますが、40名や50名といった大人数の外国語のクラスでの運営方法を考えたいと思います。
単純にとらえられないのかもしれないが、アンケートを見ると授業外での学習時間がまだ少ないと思われるので授業でだす課題について検討したいと考えている。
コミュニケーションスキルをのばすための授業であるため、ペアワークやグループワークは取り入れたい。また、プレゼンテーションについては、もう少し準備時間を取り、アドバイスやフィードバックを増やしたい。（英コミ1） 世界の様々なトピックに関するリーディング教材であったが、学生が興味を持って臨んでくれるよう、これからも吟味したい。予習復習をきちんとしてくれた学生には比較的理解しやすいものであったと思う。ただ、個々の学生について判断するのは難しいため、これからもできるだけ学生の進捗状況に気を配り指導してゆきたい。（英語2）
教材のレベルがそれほど高くないので、英語がわりとできる学生にとってはやさしい内容だったと思います。そのため、ほとんどの学生が「ちょうどいい」を選び、予習のための勉強にも積極的に取り組めなかった。次回は、少し教材のレベルを上げてみるつもりです。

可能な限り受講生の視点に立つようにし、彼らとのコミュニケーションを大切にしつつ、様々なアイディアを取り入れながら、効果的な授業が展開できるよう努めたいと考えるしだいである。
未だ双方的な授業という点では課題が多く、一方的に教員の方からの情報伝達の方が多く感じられる。今後は、もっと学生の身近な問題関心から憲法の議論につなげていけるような工夫をしていきたいと思っている。
【L多文化リテラシー】学生どうしで授業内容を深めあった、という項目の評価が高くなかったので、学生どうしで話し合い、発表する機会を設けるなどして改善したい。 【L市民リテラシー】授業の難易度が比較的高かったようなので、見直したい。
約50名の学生とうまくコミュニケーションをとることは非常に難しいと感じたところ、来年度については何らかの工夫を行っていきたい。